

Juichi WAKISAKA Race Report

JAF Grand Prix SUPER GT & SUPER FORMULA FUJI SPRINT CUP 2013

◆◆ 速さをしかとアピールする奮闘で 9 位フィニッシュ ◆◆

No. 39 DENSO KOBELCO SC430		
Drivers	Qualifying	Final
脇阪 寿一	7位	9位

開催日：2013年11月23日-2013年11月24日

サーキット：富士スピードウェイ（静岡県御殿場市、コース全長：4.563 km）

レース距離：22周（100.386 km）

入場者数：土曜日23,000名、日曜日39,000名、合計62,000名

つい3週間前に2013年度シリーズを戦い終えたばかりのSUPER GT。その特別戦となる「JAF Grand Prix SUPER GT & SUPER FORMULA FUJI SPRINT CUP 2013」が静岡・富士スピードウェイにて開催された。シリーズ戦とは一線を画すものの、シーズン最後の一戦として行われるこのイベントでは総合優勝のチームに国土交通大臣杯が授与される。名誉ある賞の獲得目指し、またチーム、ドライバーにとっても今年の集大成となる戦いにすべてをかけて挑もうと、サーキット入りした関係者からは強い意思を感じとることとなった。

そんな中、第1レースを担当した脇阪は、午前の予選で7番手を獲得。午後からの決勝ではスタートで後れを取ったが、後半には怒濤の猛追を披露。力強い走りでも9位まで挽回を果たし、レースを終えている。



■ 11月23日(土)

08:25-08:45 予選 (第1レース)

15:35- 決勝 (第1レース、22周)

【予選 (第1レース)】 7番手 / 1'31.437

通常のシリーズ戦とは異なるルールに沿って行われるこの大会。SUPER GTは2日間で2レースを実施。1選手が1レースを担当する方式が採られている。このため、予選も個々のドライバーが各タイムアタックを担当することになる。

第1レース担当の脇阪は、大会初日の午前8時25分からの予選に出走。20分間のタイムアタックに挑んだ。この日、サーキットからは雪化粧した富士山が雄大な姿をお披露目する絶好のレース日和。気温10度、路面温度11度と寒さが先行する数値ながら、強い日差しと澄み渡る青空がサーキット一面を包み込んだ。

朝早くからのタイムアタックに向けた脇阪。アタックを前に、まずはしっかりとタイヤに熱を入れる作業に取り組む。ライバル同様、セッションがスタートしてまもなくコースイン、精力的にタイヤを温めていく。一方ではクルマのセッティング確認を行うなど、僅かな時間の中で最大限の仕事に取り組むこととなった。

そんな中、まずは1セット目のタイヤで1分32秒4の自己ベストタイムをマーク、9番手につける。その後は一旦ピットへ戻り、セッティングの微調整に取り組み、ラストアタックに向けての準備を進めた。そして2セット目のタイヤへ履き替えて、コースへ。引き続き、しっかりとタイヤに熱を注入すべくコースを走る脇阪。グリップレベルを高めてからアタックを開始、ライバル達が次々とタイムを削っていく中、脇阪も自己ベストを更新する1分31秒437をマーク！これで7番手のグリッドを手にした。

緊迫したタイムアタックを終えた脇阪。「クルマもタイヤもまずまず。いい状態でした」と一言。しかしながら「欲を言えばもう1周タイヤを温めてからアタックできればもっとタイムが上がったかもしれません。でも状況的には満足しています」とやや消化不良だった点を振り返った。



【決勝】 9位

決勝レースは同日の午後 3 時 35 分にスタート。スプリントレースゆえ、22 周・100km での戦いとなる。レース中のタイヤ交換や燃料補給などのピット作業は一切ナシ。まさしくガチンコ勝負での戦いとなる。シーズンをともに戦ってきた現行車両の SC430 も今大会が最後。存分なレースをしようと改めて誓っての出走となる。

予選 7 番手からポジションアップを狙った脇阪。ライバルたちよりも固めのタイヤを選択し、後半でもより力強く、より速さを引き出せる戦略を立てた。なおこの大会でのスタートは通常レースのローリングスタートとは異なり、フォーメーションラップ後はダミーグリッドに整列してからのスタンディングスタートが採用されている。

レッドシグナルが消灯し、一斉にスタートが切られたのだが、このとき脇阪はちょっとしたタイミングのズレでスタートが出遅れてしまう。さらには選択したタイヤは、気温 13 度、路面温度 15 度のコンディションで本来のパフォーマンスを発揮するにはツライ状態のため、序盤は思うようにペースを上げられない。後方車両からの猛追に対処しつつ、懸命の走りでもずは 13 番手からポジション挽回を目指すこととなった。

ガマンにガマンを重ねる中、あろうことか 2 周目にはヘアピンコーナーで他車から接触を受けてスピン。これで最後尾へとポジションを落とすことに。だが、脇阪は諦めるどころか、逆に反撃のスイッチを加速させ、次第にペースを上げていく。この粘りが粘りを呼び、さらにペースアップを果たした脇阪は、力強い走りで次々とライバル達を逆転。レース折り返し時点では 13 番手だったが、19 周目には 9 番手までポジションを戻した。

最終盤、脇阪は前にいる集団に追い付け、追い越せと、なおもペースを緩めることなく力走。この時点でも 33 秒台という驚異的な速さをキープしながらポジションアップを目指した。だがチェッカーが近づく中、逆転のチャンスには恵まれず。最後の最後まで攻めの姿勢を貫いた脇阪は 9 位で戦いを終えることになった。



今シーズン最後のレースを終えた脇阪。「決勝では誰も装着していないタイヤで追い上げていこうと思いました。ところが、スタートで出遅れてしまい…」と悔しそうな表情を見せた。その一方で「出遅れた分、後続から思い切り攻め立てられたし、接触もありましたが、そこからは次第にペースアップし、上位と変わらない速さで戦えたのは良かった」と明るい表情を見せた。「これまでのクルマは自分的には守りのレースをせざるを得ないようなバランスでしたけれど、今回のレースに向けてチームは攻めの走りができるクルマを用意してくれました。そのことには大変感謝しています。第 2 戦のときにいいクルマが見つかった！ という手応えを感じたのですが、それと同じものを感じました。シーズン中は苦しい戦いも少なくありませんでしたが、チームとして色々手応えある

戦いもあったし、クルマの方向性も見えているので、引き続き挑戦し続けていきたいと思います」と言葉を締めくくった。
なお、チームでのパートナーである石浦選手は第2レースを担当。予選6番手、決勝7位の結果となっている。

駆け抜けるように過ぎ去った2013シーズン。2014年の脇阪のさらなる活躍に期待したい。

【Photo Gallery】



